http://www.gakurin.co.jp

NO. 223 共創ネットワーク

学林舎情報

●発行日：2021年2月20日（土）

〒661-0035　兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3　TEL 06-4962-5876　FAX 06-4962-5877　e-mail　info@gakurin.co.jp

発行：教材出版 学林舎

GAKURINSHA TOPICS

学習の行き先

共通テストから見えてくる求められる学力

2021年から導入された大学入試共通テスト（以下「共通テスト」）の特徴は、“長い問題文”と“大量の資料”、そして“身近な話題”の３つです。大学入試センター試験（以下「センター試験」）よりも読まなければならない文章量が、どの教科・科目でも増加しました。特に英語は、問題文すべてを読み切ることができなかった受験生も多かったようです。問題文中には資料も多く含まれており、資料から必要な情報を的確にとり出すことが求められていました。また、数学Ⅰでは100m走のピッチとストライドに関する2次関数の問題、世界史Ｂではコレラやペストなど過去の感染症についての問題が出題されました。地理Ａでも、タピオカの原材料の産地についての問いがあるなど、身近な話題が取り上げられていました。

今までのセンター試験との違いが特に際立っていたのは英語です。配点は、センター試験では筆記200点・リスニング50点でしたが、共通テストではリーディング・リスニングがそれぞれ100点に変更されました。また、リーディングでは発音や語句並び替えの問題がなくなり、すべて読解問題となりました。ルームメイトとのスマートフォンでのやりとりや、ミュージシャンのファンクラブへの入会のことなど、身近なことが多く取り上げられていました。さらに、リスニングでは、これまで通り音声が2回流れた問題と、1回しか流れなかった問題がありました。

最初に挙げた３つの特徴から見えてくる出題者側の意図は、『文章を読み、理解する力をつけましょう。資料から正確な情報をつかむ力も必要です。それに、社会の話題にも目を向けましょう。』ということだろうと思われます。これらが“求められる学力”だと言って良いでしょう。見る角度を変えると、これは、目の前で起こる事象に対して事態を正確に把握し、正しく対処できる力であるとも言えます。

これらの力を身につけていくためには、やはり日々の地道な学習が基本になります。その基本に、何点か付け加えるとすれば、読書・新聞購読・リスニングです。

読書はすべての学習の基本です。共通テストの今回の問題文の長さを考えると、やはり普段から本には慣れ親しんでおきたいと考えます。また、新聞に毎日目を通すことも習慣にしておきたいものです。最近は、新聞を購読していない家庭も増えていると聞きますが、ネットニュースを上手に活用するのも良いでしょう。興味をもった記事を新聞から切り抜いてノートに貼り、感想を書くという、よく行われる方法も、文章を読み、理解する力を養うとともに、社会で話題となっていることがらを知るのにも役立ちます。新聞には、資料を含む記事も多いので、資料を見て必要な情報をとり出す練習にもなります。

リスニングも語学教育で従来から行われてきたことではあります。書店の本棚には、英語のＣＤのついた本がたくさん並んでいます。気に入ったものを選んで、今まで以上に繰り返し聞いて英語に慣れていきたいものです。

“求められる学力”は、受動的な表現です。しかし、この学力を、子どもたちには能動的に身につけて欲しいものです。学力は自発的に楽しく取り組んでこそ真に身につきます。そのためには、アクティブラーニングなどの手法を取り入れながら、子どもたちが自発的に取り組めるようなはたらきかけが必要であると思います。（文／学林舎編集部）

学習の行き先

共通テストから見えてくる高校入試

2020年まで30年間にわたり実施されてきた「大学入試センター試験（以下「センター試験」）」に代わり、2021年から「大学入学共通テスト（以下「共通テスト」）」の実施が始まりました。共通テストでは、知識の理解を問う問題の質の向上に加え、思考力・判断力・表現力を求める問題が多く取り入れられることが謳われていました。

■センター試験からの変化

共通テスト実施初年度となった今年の問題を見てみましょう。数学では、100メートル走で最もタイムがよくなるストライド（１歩当たりの距離）と１秒当たりの歩数を求める問題がイラスト付きで出題されました。国語では、評論文の内容を整理した生徒のノートを埋めさせる問題が出題されました。いずれも、センター試験にはなかった新趣向の問題です。そして、一番大きく変化したのは英語の問題でした。

■変化の大きかった英語

・配点

センター試験では、「筆記200点・リスニング50点」でしたが、共通テストでは「リーディング100点・リスニング100点」と変化し、「聞く力」の比重が高まりました。

・問題傾向

センター試験で出題されていた、「発音・アクセント・文法」などを単独で問う問題がなくなり、読解問題のみになりました。読解の内容は、ルームメイトの忘れ物をめぐるスマートフォンでのメッセージのやりとりや、ファンクラブの入会、ウェブの情報をもとにした旅行プランの組み立て、アイスホッケーの安全対策の記事など多岐にわたりました。傾向として、実生活の中で遭遇しうる内容のものが多く出題されたことから、単なる読解の能力ではなく、情報を処理し、運用する力が求められるようになったと言えるでしょう。

・変化した問題傾向への賛否

大きく変化した英語の共通テストに対しては賛否両論あるようです。「実生活で活きる、生きた英語に近づいた」とプラスに捉える意見がある一方、「今回のテストで求められたのは情報処理能力であり、思考力・判断力を求める問題には遠いものであった」という声もありました。

■高校入試への影響

今回変化の大きかった英語の問題傾向から読み取れることとしては、「試験で点数をとることだけを目的とした試験ではなく、実生活で役に立つ学力を身につけさせることを目的とした入試問題に変わっていくことが予想される」ということです。

2021年は共通テスト実施の初年度ということもあり、今後変化していく可能性は大いにありますが、今年の共通テストの内容をふまえ、高校入試にも少なからず影響が表れるでしょう。各教科の知識を身につけることはもちろんですが、今後は、生活の中で流行しているトピックやツールなど、さまざまなことにアンテナを張り巡らせる意識づくりが必要になってくるかもしれません。（文／学林舎編集部）

理念を教材にこめて

＊2021年学林舎カタログより

学林舎が未来を切り拓く小学生に必ず学習してほしい教材は

「成長する思考力GTシリーズ」

「学習効果」を実感できる教材

発刊して２０年以上が過ぎる教材が今も継続して、様々な学習現場で利用されている理由は「学習効果」を実感できるからです。

全国模試で上位、有名国立大学への進学、といった声を、ご利用いただいている指導者の方からよく聞くことがありますが、私が一番心に響いたのは、ＧＴを使っていた大学生が、「自分で考え、分析する力をＧＴを通して得ることができました。そのことによって、目標に向かって何が必要なのか、大切なのかを理解できました。」と言った言葉です。

自分の生きる道を自分で切り拓いていくことは、できるようでできないのが今の社会の現状です。そして、今の小学生が大人になったときもっとも必要な力なのです。成長する思考力ＧＴシリーズは自信と確信をもって、学習現場に提案できる教材です。

日本語を母語として、自由自在に使える表現力の基盤を獲得する

成長するドリルシリーズ、成長する思考力ＧＴ国語シリーズを通して、学習者に一番身につけてほしい力は「日本語を母語として、自由自在に使える表現力の基盤」です。この基盤を小学生のうちに身につけているか、いないかで、表現力の伸びしろは大きく変わってきます。大人の皆さまはよくわかっていると思います。様々な読書、文章要約をしてこなかった場合、大人になって自分の表現力のなさを痛感します。私もその一人です。そのため、私は大人になってから様々な読書、文章要約などを通じて、読む力、書く力を身につけました。そして、いつも思います。自分が小学生時代に「成長する思考力ＧＴ国語があって、学習していればもっと違ったのに。」だから、自信をもって言えます。

「成長する思考力ＧＴ国語を小学生のうちに学習してください。」

算数的表現力

文部科学省は、新学習指導要領において「表現力」をキーワードに、各科目を学習させるように学習現場に求めています。算数も算数的表現力と言っています。算数的表現力って一体何なのでしょうか？教科書や全国学力テストなどを見ると、文章題・図形問題・資料問題などを中心に、日常生活とリンクする問題が増えています。しかし、リンクさせるのは一瞬で、次の瞬間、数字の世界だけの学問になっているのが算数です。計算問題の反復など、算数の象徴といえるものは、４０年前と変わらず健在です。その象徴的なものを外したのが今から２０年前に発刊した「成長する思考力ＧＴ算数シリーズ」です。この教材には、計算の反復問題はありません。そして、パターン学習もありません。１０～５級は、文部科学省が求める算数的表現力(文章題・図形問題・資料問題など)を身につけることのできる教材です。４～１級は、中学入試を意識した問題群になっていますが、反復ではなく「算数知」の獲得です。簡単に言えば、算数(論理力・思考力)という学問の基礎レベルをあげるためです。

算数的表現力、算数も含めてなぜ必要なのでしょうか。国語力と同じで、算数力＝論理力・思考力がないと自分が生きていく道を自分の手で拓くことは難しいからです。「？」に対して、自分の中で整理、分析、解決していく力が算数力であり、算数的表現力だと私は確信しています。コロナのようにこの数十年人類が経験したことがない状況下において、冷静に分析して、自分自身はもちろんのこと家族を守ることができるのは、算数力があるかどうかにあります。見た目の数字、情報だけに踊らされるのではなく、その真意を自分で自分なりに理解していかないと不安の渦を突破することはできません。

子どもたちの多くが算数という学問が数字、計算だと思っています。数字、計算も大切ですが、大切なのは数字を読み取る力です。そして、その数字を自分の論理、思考にどうつなげていくかが必要なのです。反復した計算問題がない成長する思考力ＧＴ算数を通して、まずはそれを子どもたちに気づいてもらえればと願っています。

クロスロード Crossroad

第114回　文／吉田 良治

掛け声のスポーツインテグリティ

2018 年に多発したスポーツ界の不祥事を受け、2 年後の東京五輪・パラリンピックを控え海外に悪い印象を与えてはいけないという懸念もあり、超党派の国会議員によるスポーツ議連からの提言を受け、国はスポーツ界の健全化に向け“ スポーツインテグリティの確保 ”にかじを切りました。しかし“ スポーツインテグリティ ”という耳障りの良い言葉を発するだけでは、スポーツの現場には中々その意図が浸透されることはなく、未だスポーツ界の様々な不祥事は改善されていません。

指導者の体罰・パワハラをはじめとしたスポーツ界の暴力問題に対し、昨年は世界最大の人権 NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチから、日本のスポーツ界の暴力問題の調査報告書が公開されました。この調査のきっかけは 2012 年に発生した大阪・桜宮高校バスケットボール部の体罰自殺事件でした。当時は東京五輪・パラリンピック招致の最終段階にあり、日本のスポーツの暴力問題が招致活動でマイナスイメージを与えかねない、と火消しに躍起になりました。ちょうど 3 年前の“ スポーツインテグリティ ”の提言と似た状況でした。しかし、翌年に東京でオリンピック・パラリンピック開催が決まると、スポーツ界の暴力問題の改善の機運は、少しずつ薄れていきました。

また、近年日本のスポーツ関係者が特殊詐欺や持続化給付金詐欺など、反社に取り込まれるケースが増えており、国が掛け声として発した“ スポーツインテグリティ ”という言葉だけでは、スポーツの現場の健全化は成し遂げることは困難です。

そして今月は長年日本のスポーツ界に君臨してきた森喜朗東京五輪・パラリンピック組織委員会会長が、女性蔑視発言問題によりその地位を辞する事態に発展しました。女性蔑視をはじめとした人権を著しく損ねる言動は、オリンピック憲章に反する行為でもあり、東京五輪・パラリンピックを運営する組織のトップにあるまじき行為であったと、国内外から激しい非難を受けて、昨年新型コロナウイルスの感染拡大で延期となった東京でオリンピック開催まであと 5 か月となったこの時期に、その職を退くことになりました。

私は東京五輪・パラリンピックの開催が決まって以降、この国でオリンピック・パラリンピックを開催する意義・価値は何か、と事あるごとに発信・問いかけ続けてきました。招致段階では“ コンパクトオリンピック ”を謳い、総予算 7,000 億円規模で実施する予定が、膨れ上がった最終大会開催費は 3 兆円を超えました。その多くは国や都の税金を投じるもので、当時の安倍晋三首相が発した“2020 年の東京オリンピック・パラリンピックでは、東日本大震災からの復興を見事に成し遂げた日本の姿を、世界の中心で活躍する日本の姿を、世界中の人々に向けて力強く発信していく。”という“ 復興オリンピック ”のアドバルーンとはかけ離れたものとなっていきました。そしてコロナ禍の今、今度は“ コロナに打ち勝った証としての東京五輪・パラリンピック ”と、その場しのぎの新たな掛け声が飛び出てきました。

日本オリンピック委員会・JOC の山下泰裕会長は、東京オリンピックで日本選手団の金メダル獲得目標を 30 個と定めています。そのために投じた 3 兆円、金メダル 1 個の価値は 1,000 億円です。金メダルの数だけが世界に示すことのできる日本のオリンピックの価値なら、スポーツ偏重により引き起こされてきた、日本のスポーツ界に根深く蔓延る不祥事の改善、スポーツ界の健全化を目指す“ スポーツインテグリティ ”は絵に描いた餅になってします。

（つづく）